



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『ふらの考：「まちづくり」から「まち育て」へ』 解題：「観光創造専攻」設置前夜のエピソード
Author(s)	筑和, 正格
Citation	CATS 叢書, 11, 239-244
Issue Date	2017-03-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66674
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS11_31.pdf



『ふらの考 — 「まちづくり」から「まち育て」へ — 』解題

「観光創造専攻」設置前夜のエピソード

筑和 正格

北海道大学 名誉教授／放送大学北海道学習センター 所長

1. 「映像事例」の着想

2006 年夏，翌年に国際広報メディア研究科に設置される新専攻で開講すべき授業科目について，関係者たちは議論を重ねていた。というのも，経済産業省の「集客交流経営人材の在り方に関する調査研究事業」の一環として，新専攻の授業科目のいくつかをモデル化・体系化し，それを公開講座として年末に札幌・東京・大阪で開講して，受講した市民から評価を求める，という課題を抱えていたからである。この状況下で，それまで 5 年間「現代都市文化論」を担当していた筆者は研究科長室に呼び出された。

2003 年秋，富良野青年会議所理事（当時）の S 氏が「現代都市文化論演習」の授業参観に訪れた。9 月の同所例会で〈「ふらのスタイル」をさがして～北海道・富良野のまちづくりを考える～〉をテーマに掲げて，第 1 部は逢坂誠二ニセコ町長（当時）の基調講演を，第 2 部では彼を囲んだ参加者による座談会を行う構想を実現させるためである。つまり S 氏は，筆者の授業にやって来て院生たちにこの会合への参加を呼びかけたのである。この出会いがきっかけで，S 氏と筆者との親交が生まれた（筑和 2007: 4-6）。

話を 2006 年に戻すと，新専攻設置云々とは無関係に，指導学生に実践研究のフィールド調査を体験させたいとの思いから，筆者は S 氏に，富良野¹⁾におけるまちづくりに関するヒアリングの場の設定可能性を 7 月に打診していた。S 氏はそれに応えて，精力的にまちづくりに取り組んでいる 8 名の方々に呼びかけて座談会を企画した。そして，当方 5 名，先方 8 名による情報・意見交換の機会が現実のものとなる。3 時間を超える熱心な話し合いを通じて，我々は富良野の現状についての貴重な知見と考察のためのキーワードを獲得することができた。

上述の呼び出しを受けたのは，富良野から戻り，相当な量にのぼる意見交換の内容を整理し記述しているときであった。話の内容は，新専攻で開講する担当授業において映像教材を用いてはどうかという提案で，富良野で構築した人間関係を頼りにさらに聞き取り調査を進め，その様子・内容を映像化するならば授業効果を高めることが期待できようという示唆を受けた。

提案を受諾すると早速映像制作の専門家の S 氏を紹介された。S 氏は，長年テレビ業界でカメラマンを務めていたが，大手テレビ局勤務の立場では自分が社会に伝達すべき映像の

制作が不可能であると判断して、30代で独立してプロダクションを設立し、自主的にテーマを定めて番組を作成し、その採用をテレビ局に提案するという事業を行っていた。扱うテーマは「保健・医療・福祉」「住・環境」「食・教育」に特化していたが、「教育」の部分で筆者の視点とS氏のそれとがうまく一致したのである。コラボレーションが始まった。

上で触れた「考察のためのキーワード」は「農業」「食」「環境」「観光」である。これらを念頭に置きながら、文字起こしした座談会の内容を熟読・吟味して映像教材に採用する被写体の選定を行い、富良野のまちづくりの特徴を3部からなるドキュメンタリー映像として提示する作業を2006年の夏から秋にかけて実行した。

2. 『ふらの考「まちづくり」から「まち育て」へ』

2-1 映像の概要

映像教材は、「第1部 農と観光の共生」「第2部 環境創造と観光の可能性」「第3部 夢と観光」で構成されている。各パートのタイトルに「観光」を入れたのは、新専攻の授業科目であることを示すためであり、また、「まちづくりの要素」が「そのまま観光の3大要素となっている」（筑和 2003: 334）事例が示唆するように「まちづくり」と「観光」との間に親和性を想定することが可能だからである。映像事例の内容は以下の通りである。

		事 例		意 義
第1部	農と観光の共生	1	農家とシェフのコラボレーション	「農」と「食」の新しい関係
		2	農家主婦の創造活動	生産者と消費者の直接関係
		3	食のトライアングル	農業者・商業者・消費者の連携
第2部	環境創造と観光の可能性	4	行政による生活ごみのリサイクル	廃棄物の資源への転換
		5	不要な石のリユース	廃棄物の資源への転換
		6	休耕地のリデュース（還元）	放棄地の観光資源への転換
		7	自然のリデュース	景観の創造，自然保護意識の育成
第3部	夢と観光	8	棟梁と弟子	Identity 形成の過程
		9	富良野と演劇人	個性の練磨の場
		10	ガラス屋と飲食店主	第2の人生構築と援助者

全体の表題に「まち育て」という語が掲げられているのは、①富良野で地域社会活性化に取り組む人々がこの用語を用いている、②「まちづくり」という語の意味内容が「変化」もしくは「退行」しており、これに替わる用語が希求されていた、からである。端的に言

えば、「まちそだて」とは「まちづくり」の次の段階の営為であり（筑和 2008: 98-101）、持続性を備えた地域社会活性化活動を表象する用語なのである。

表を一見してわかるように、第 1 部は「考察のためのキーワード」のうち「農」と「食」を、第 2 部は「環境」を考察の指針としている。また、「観光」というキーワードが全体に通底していることは、言を俟たない。第 3 部で富良野にやって来た人物たちの「夢」を扱ったのは、このまちが巧まずして人を育む場としての属性も備えていることを、聞き取り調査の過程で認識したからである。「まち育て」は「それに関わる人間の意識・行動」も育む、と見る研究者もいるが（延藤 2005: 9）、「そだてられた」まち（の共同体）が、新来の人々を「そだてる」機能をもつという現実がある。「人間と環境のインタラクション」が存在するのである。

2-2 「経済」と「経済外」

第 1 部と第 3 部は、ともに富良野地域における注目すべき人間関係に焦点を合わせているが、第 1 部では「経済」が不可欠な要素であり、第 3 部では「経済外」に重点が置かれている。

第 1 部が示す人間関係は、双方向性をもつフラットなものであり相互の束縛性も希薄なので、これをネットワークと呼ぶことができる。各映像事例の登場人物は、歯切れ良く発言し、明確な主張・メッセージを発信しているが、その内容から如実に読み取れるのは、彼らが自分たちの活動領域の現状改善を志向していることと、彼らがある価値を共有しており、それを軸として相互的信頼関係を構築していることである。

この人間関係の媒介項として「経済」も重要な位置を占めている。しかし、「経済」が人間関係の存亡の鍵を握っているかといえ、その答えは否であろう。なぜならば、たとえば事例 1 の「農家とシェフのコラボレーション」においては、コラボレーションの成否と当事者の生活基盤の安定とが連動しているわけではないからである。つまり、農家（生産者）と加工者（レストラン・シェフ）の「食材」をめぐる相互提案の関係が解消されたと仮定しても、そのことによって彼らの生活自体が脅かされるとは考えがたいのである。事例 2 と 3 においても経済行為がポイントになってはいるものの、事例 1 と同様にそれがすべてではない。第 1 部の各事例は、確かに「収益性」を追求してはいるが、それ以上に一あるいは、それと同等に一「価値」の実現を希求している。この事情は、第 2 部の事例 5 と 7 についても同様である。

提示した事例に現れる人間関係・ネットワークを、「相互扶助、協力、信頼」という「正の影響」をもつ「Social Capital 社会関係資本」（パットナム 2006: 19）という概念と関連させて論じることが可能かもしれないが、ここではそれには触れない。いずれにしても、各事例が示す営為が、富良野社会に活気を与え、住み心地のよさを高めていることは間違いないところである。

3. 反応と評価

3-1 公開講座受講者の反応

札幌・東京・大阪で実施した公開講座における受講者の反応は興味深いものであった。札幌・大阪での反応と東京でのそれに、筆者の実感では対照的なところがあったのである。それは、私見では、公開講座のタイトルに「一地域づくりの“法則”を探る」という表現が置かれたことに起因しているように思われる。

札幌・大阪の受講者は、地域社会活性化の可能性についてのプレゼンテーションにおおむね好意的で、我々の事業を応援する雰囲気が濃厚であったのに対して、東京会場の反応は必ずしも全面的支持を感じさせるものではなかった。公開講座に対するアンケートにそれが表れている。その一例が筆者担当のパートについての（ある大組織の役員による）感想で、それは「事例というものには賞味期限がある。しかるに、一定期間しか役に立たない事例を映像で表現するというのは、資金の浪費ではないか」というものであった。筆者はその後 10 年間このときの映像を教材として活用し続けているので、この見解は必ずしも射てはいないが、そうした意見を発するメンタリティには興味をひかれる。そこには「東京＝中心 vs 地域＝周縁」そして「中心：Control → 周縁」という観念が存在しているのかもしれない。その場合、地方が独自で「地域づくりの法則を探る」ことを、おこがましい越権行為だと感じるのであろう。感想の主が全国に張り巡らされた支店網を統括する立場にある人物であるという事実も、この推測を支えている。

対照的に、大阪では予想外の反応に出会った。受講者の 1 人で旅行代理店勤務の人物が、受講後に筆者に歩み寄り、教材映像の一部をビジネスの場で活用することの是非について尋ねたのである。第 1 部の事例 2 の映像を富良野に向かうツアーバスの中で放映し、事例が伝える営為の意義を乗客に説明した後、当該のグループのもとに赴くという着想がその人物の念頭に浮かんだとのことである。ある「思想」に立脚した営為に直接触れることがツアー客の満足度を高める、ということはこの人物が熟知しているがゆえのことかもしれない。外部資金による「教材」作成であることから、この着想は現実化しなかったが、教室内で用いる教材とのみ見なしていた映像が、より広い活用領域をもちうることに気づかされた経験である。

3-2 事例の評価

「まちそだて」論が高等教育機関で展開するにふさわしい「学問＝科学」でありうるためには、方法論（基礎概念群）に加えて、事例自体の有効度を計る客観的な評価方法・基準を備えることが望ましいのではないかと考えられる。基礎概念については、すでに若干の考察・検討を開始しており、それに依拠して、各事例が「まちそだて」の営為たりうるか否かについての考察も実施している。さらに、「比較」という方法を用いて各事例の特徴を際立たせる試みも行っている。参考までに、富良野と十勝の「まちそだて」の特徴を

比較した表を提示するが（筑和 2008: 118）,「比較」は社会科学の領域で重要な役割を果たしうるのである。それを強調している研究者のことばを引用しておこう：「比較とは、変数をコントロールした実験をすることができない社会学や歴史学にとって、欠かすことのできない重要な方法である。人間の想像力はそれほど豊かではない。社会や時代の比較によってはじめて、現在ある社会がべつなすがたをとりうる可能性、社会の潜勢態についての想像力を獲得することができる。ミシェル・フーコーの系譜学も、そのような潜勢態を創造するための方法であった」（上野 2011: 72）。

	富 良 野	十 勝
類型	資本・メディア依存型	草の根型
メンタリティ	優しさ	自立性, 積極性
人間関係	融和性, 開放性	団結性
農 業	観光と並ぶ基幹産業 畑作中心 多品種・適量	唯一の基幹産業 畑作 & 酪農 重点品目・大量
観光のアピール・ポイント	素朴な自然景観 物語性	雄大な自然景観 都市文化
観光と農業の結合	結合度が高い, 積極的	局所的に存在, 無関心派も存在
女性の活躍度	中程度	かなり高い
ネットワーク	地域網羅ネットの形成中	局所的にのみ存在する
産官学連携	産と官の連携は緩やか 学との連携は, 地域外（北大） と緩やかに	産と官の連携は密 学との連携は, 地域内（畜大） で密接に

上で、「事例自体の有効度を計る基準」と言ったが、実はその1つはすでに「発見」済みである。それは他ならぬ「時間」である。映像作成のための取材時点では、事例4「生活ごみのリサイクル」と例9「演劇人」以外の事例は、存在開始からまだそれほどの年数を経てはいなかった。そこで、7年後の2013年に筆者は改めて、元富良野青年会議所理事で現富良野演劇工場理事長のS氏に、各事例に登場する人物たちとネットワークのその後について問い合わせしてみた。確認したところでは、1から10の事例について、6の「植栽による耕作放棄地の（観光）資源化」はいまだ実現しておらず、また、8の「棟梁」はやむなく廃業しているが、他の8例はすべて現存・継続しているということであった。つまり、我々が映像教材作成時に抱いた「持続の予感」は、ほぼ的中しているのである。その結果、上で言及した基礎概念群 — 「小事業性」「〈経済〉と〈経済外〉の共存」「個人の可視性」 — の有効性への期待がさらに高まることとなった。

基礎概念群と「継続（持続）時間」という「評価基準」は設定されている。科学への道

を前進するためには、さらなる「基準」の発見・創出が求められるところである。研究者のライセンスに手が届きかけている我が後進には、まさにそのことを求めたい。

注

- 1) ここでいう「富良野」とは、富良野市に限定したものではなく、基本的に上富良野町・中富良野町・南富良野町などを含む「富良野地域」のことを言う。

文 献

延藤安弘

2005 『人と縁をはぐくむまち育て—まちづくりをアートする』萌文社。

パットナム, R.D.

2006 『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柴内康文訳, 柏書房。

筑和正格

2003 「まちづくりには何が必要か —『北海道都市問題会議』が提示する事例と課題—」
『大学院国際広報メディア研究科・言語文化部紀要』第 45 号: 321-342。

2007 『観光創造の理論と実践 第四巻 “まちづくり”から“まちそだて”へ ~富良野の事例から学ぶ~』北海道大学: 4-6。

2008 「まちそだて北海道 —ロマンの富良野, ディバイズの十勝—」『大学院メディア・コミュニケーション研究院 研究叢書 70 大交流時代における観光創造』: 97-118。

上野千鶴子

2011 『ケアの社会学 当事者主権の福祉社会へ』大田出版。